◇反戦カフェ　　クリミアとは？

世界史上例をみないほど主が度々入れ替わった

ヤルタ会談（1945.2.4～11）

会議場　**リヴァディア宮殿**

フロレンス･ナイチンゲール

1820～1910。 イギリスの看護婦。
近代看護教育の母。
マルクスは、1855.4.14『ニューヨーク･デイリー･トリビューン』の記事で、彼女の働きを賞賛している。

ウクライナ
ミコライフ
Mykolaiv
ノバ・カホフカ
Nova Kakhovka
メリトーポリ
Melitopol'
マリウーポリ
Mariupol'
ヘルソン
Kherson
オデッサ
Odesa
アゾフ海
Sea of Azov
エヤ川
Jeja
カルキニト湾
Karkinit Gulf
瀬戸内海の1.5倍強の広さ
ロシア
チェムリュク湾
Temrjukskij zaliv
クリミア半島
Kryms'kyi pivostriv(Crimean Peninsula)
黒　海
シムフェローポリ
Simferopol'
ノボロシースク
Novorossijsk
セバストーポリ
Sevastopol'
90km
ヤルタ
クリミア大橋　18km　2018開通
cf）東京湾アクアライン　15km

クリミア戦争の「セバストポリ攻囲戦」を記念する碑

ロシア人は、クリミア、特にセバストポリは、祖先たちが血を流して獲得し守ってきた領土だという意識が強い

クリミア概観

- 面積2.7万㎢（九州と四国の中間の広さ）。人口189万（2015年）
- 半島（ペレコープ地峡でウクライナ本土とかろうじてつながっている。ロシアとはクリミア大橋—2018年開通—でつながる）
- 半島南部は地中海性気候
- 世界史上例をみないほど主が度々入れ替わった

- 1945年２月、ヤルタ会談
- 1954年ロシア共和国からウクライナ共和国に移管
- 1991年クリミア自治共和国としてウクライナに留まる
- 2014年ロシアがクリミアを併合

◎クリミア併合前史　1

- 1944年、ソ連がクリミアを回復。ナチスに協力したとの理由で、クリミア・タタールを中央アジアへ強制移住（20万人以上とも）。貨車を使って行われ、目的地に着く前に、多くは絶命。
- 1945年、自治共和国から通常の州へ格下げ
- フルシチョフ時代、対独協力を理由に強制移住をさせられた他の民族は名誉回復し、帰還を許されたが、クリミア・タタールだけは許されず。
- 1954年、ペレヤスラフ条約（**ザポリッジャ・コサックとモスクワ国家の同盟条約**）三百周年を記念して、ロシア共和国とウクライナ共和国の友情の証として、クリミア州はウクライナへ移管。
- 1987年，3000人以上のタタール人が赤の広場にすわり込み，クリミア帰郷とタタール人による自治共和国の再興を要求したが，翌年却下された

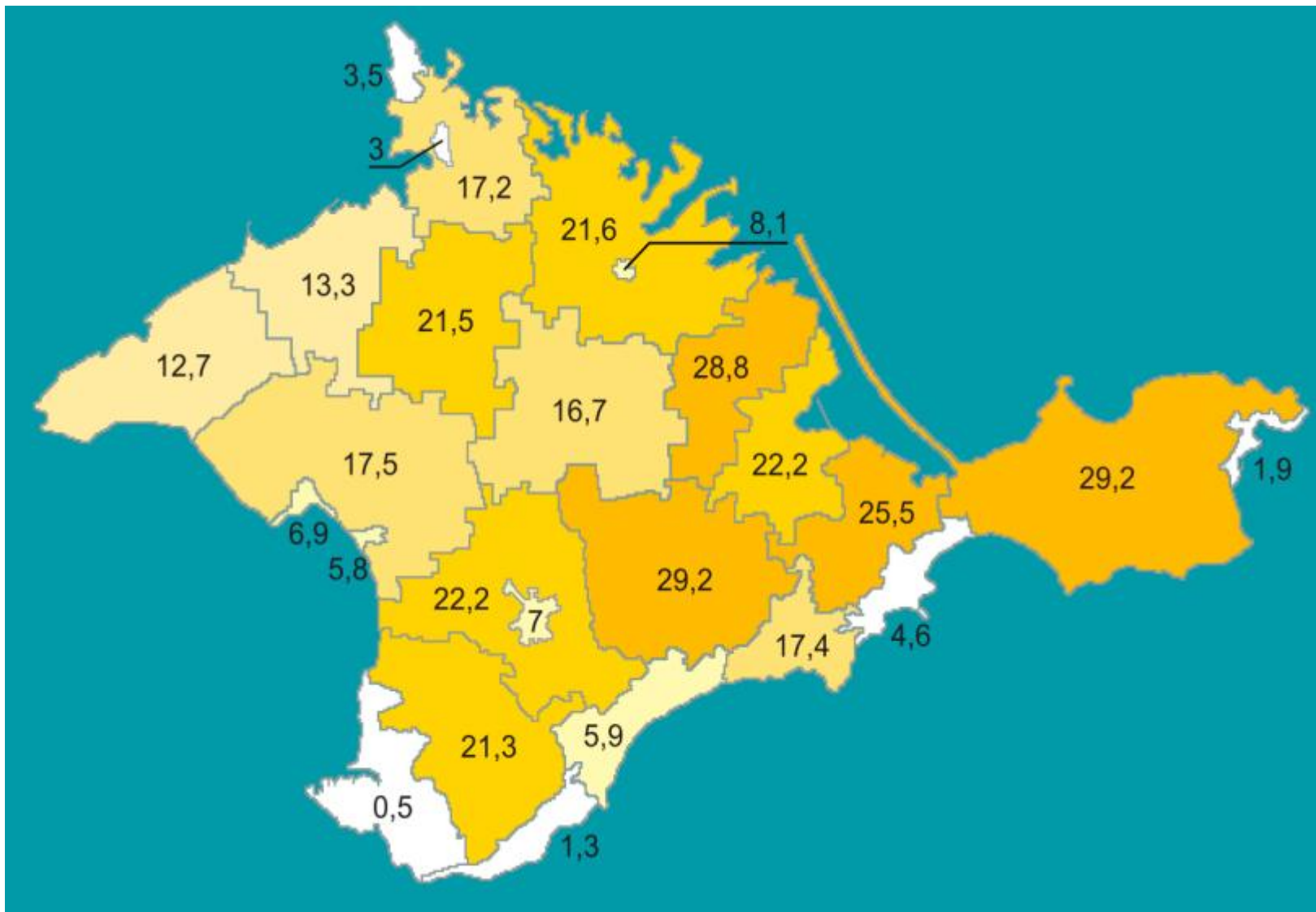
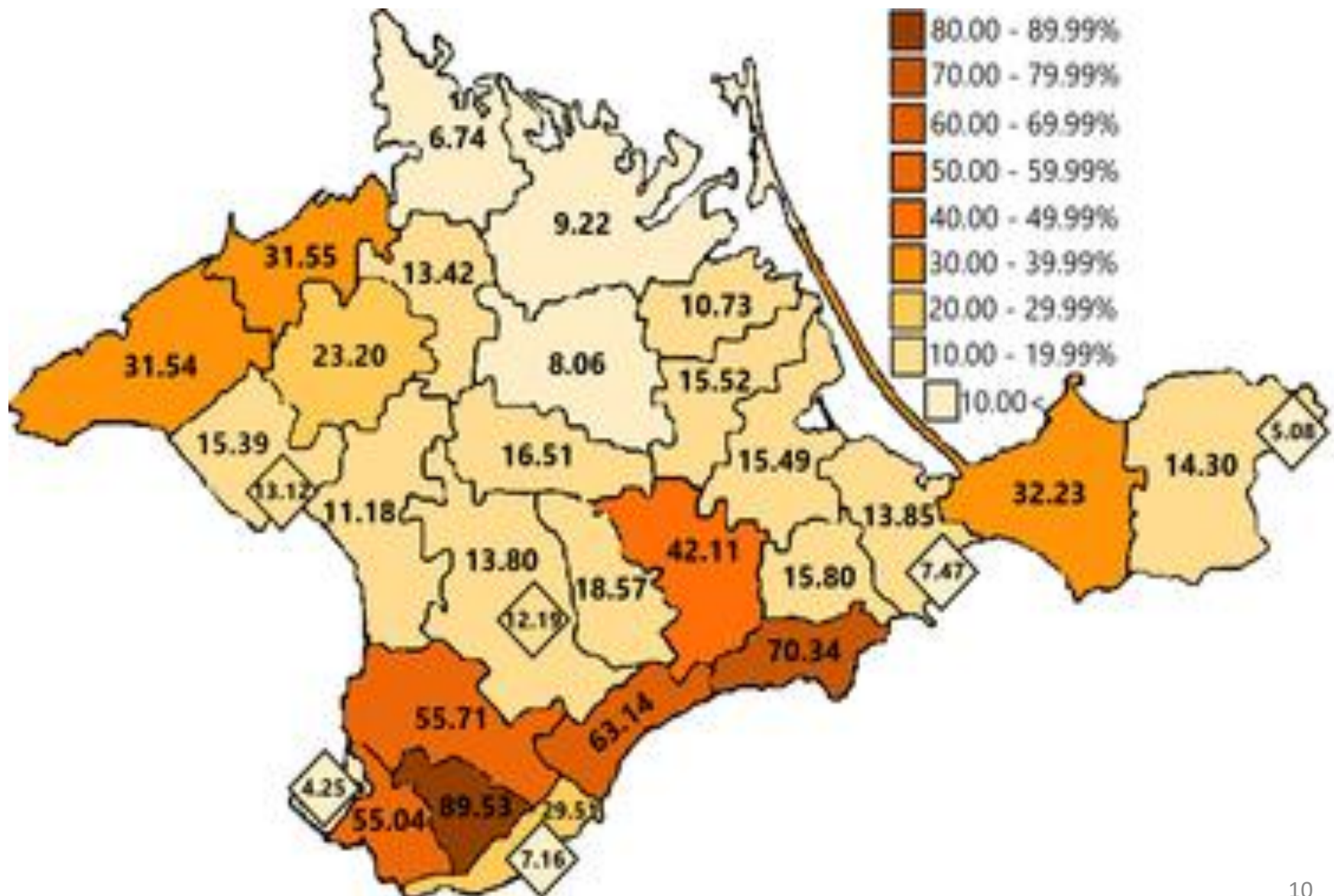
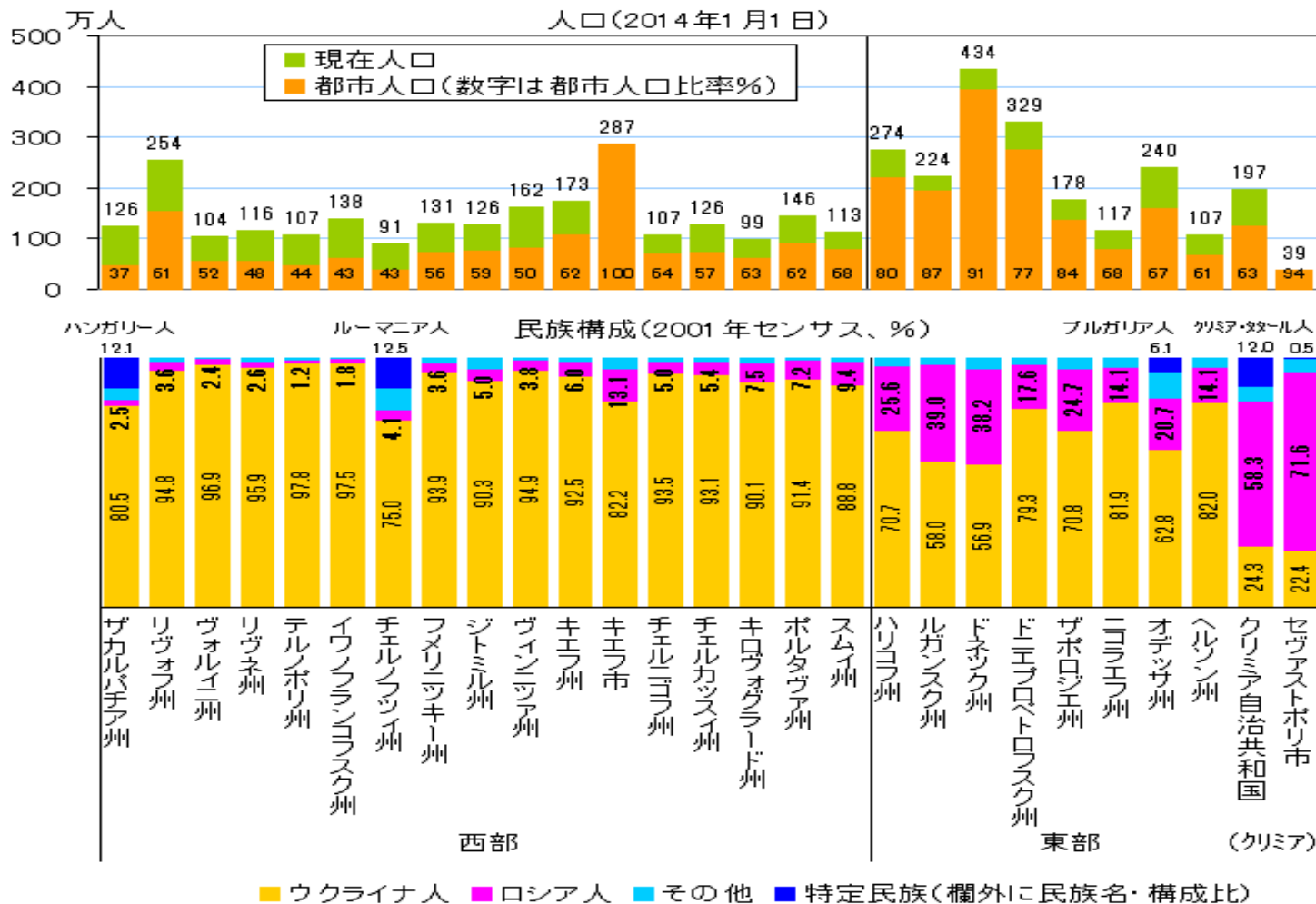
◎クリミア併合前史　2　　*分離主義的傾向あり*

- 1988年頃から、クリミア・タタールは、無許可で帰還し始める
- 1991年1月20日、クリミアは住民投票を行い、「自治共和国」のステータスを回復
- 1993年、大統領職を導入
- 1994年1月大統領選で、ユーリー・メシュコフ選出
- 1995年、ウクライナは大統領職を廃止
- 1999年、大統領選で、共産党候補シモネンコ当選
- 2002年の議会選挙以降は、他の東部諸リージョンと同様、地域党が共産党の票田を切り崩していった

クリミア･タタール人

- クリミア半島に起源をもつ
  チュルク系先住民族

- スンニ派ムスリムが大半

2001年のクリミア・タタール人の分布（数字は%）

1939年のクリミア･タタール人の分布

ウクライナ州市別人口・民族　クリミア半島　236万人

2010年ロシア国勢調査における

民族別人口ランキング　　上位6位以下割愛

- ロシア全体　1億4284万人

- ①ロシア　1億1101万人　80.9%
- ②タタール　531万人　3.9%

タタール人は2位！クリミアのタタール人は、40～50万か？

- ③ウクライナ　192万人　1.4%
- ④ヴァシキール　158万人　1.2%
- ⑤チュヴェン　144万人　1.0%
- ⑥チェチェン　143万人　1.0%

第二次大戦後　ウクライナの領土拡大　～　住民交換

- ユダヤ人激減。ドイツ人、クリミア・タタール人追放
- ヨーロッパ側に16.5万㎢余り領土拡大（≒北海道+東北）
- 住民交換により
  ポーランド人約100万人、チェコ人約5万人移出
  ウクライナ人200万人が移入

『ウクライナを知るための65章』（明石書店）
「31　ソ連体制下のウクライナ」より

クリミア併合とは何だったのか？　驚天動地の事件を再考する　①　　服部倫卓

- 首都キエフが反政府デモで騒然とする中、2014年2月8～18日にウクライナ全土で実施された世論調査結果がある。その中に、「ロシアとの間でどんな国家間関係を望みますか？」という設問があった。その質問に対し、「ロシアと1つの国に統合されたい」と答えた回答者の比率は、ウクライナ全体では12.5%。地域別に見ると、ロシアとの統合を望む声は、やはりクリミアで最も多く、41.0%がそれを望んでいるという数字が出た。非常に多いことは事実だが、筆者はむしろ、この時点ではまだ、対ロシア統合支持が過半数ではなかったという事実を重視したい。
- 様相を一変させたのは、やはり首都キエフにおける政変劇。2014年2月22日のヤヌコービチ大統領逃亡でクライマックスを迎えた政変は、当初は「ユーロマイダン革命」と呼ばれ、またその後ウクライナ本国では「尊厳革命」と名付けられ美化されている。筆者は、国家を食い物にしたヤヌコービチ大統領への怒りから国民が立ち上がったのは当然だと思うし、彼らの多くが掲げていたヨーロッパ統合への参入という理念も尊重する。が、方法に問題があった。曲がりなりにもヤヌコービチは選挙で選ばれた合法的な大統領であり、ウクライナの特定の地盤（クリミアもその1つ）、支持基盤を代表していた。反政府デモを受け、ヤヌコービチ政権側も譲歩の姿勢を示していたし、大統領の任期はあと1年しか残ってなかった。交渉で当面の妥協を図り、しかる後、ウクライナの進むべき道は1年後の選挙で決着を着けるといったことは、できなかったのか？　実際には、反政府勢力の一部が尖鋭化し、激しいデモでヤヌコービチ政権を追い詰めて、体制を暴力的に打倒することが自己目的になってしまった。このようなやり方は、国民統合にとってマイナスでしかなかった。

続き②

- そして問題は、2014年の政変の過程で、過激かつ暴力的な右派勢力が台頭し、彼らの民族主義的な主張がウクライナの時代精神のようになってしまったことです。一般的に国民国家というものは、シビック（市民的）、エスニック（民族的）という2つの類型に大別される。1991年に、多くのロシア系住民も含め、ウクライナ住民の圧倒的多数がウクライナ独立に賛成したのは、まさに前者が重視された結果だった。つまり、民族や言語にかかわりなく、皆がウクライナという場で権利を享受し幸福を希求できるというコンセンサスがあった。

- ところが、ウクライナ独立後の四半世紀の間に、言語政策や歴史認識などでエスノナショナリズムが強まっていき、ロシア系住民は肩身の狭い思いをするようになった。そして、2014年2月の政変で、エスノナショナリズムが最終的に勝利したような格好になってしまった。クリミアの人々にしてみれば、まったくあずかり知らないところで、ウクライナのありようが勝手に決められてしまい、自分たちが二級市民に転落したような感覚を抱いたことでしょう。クリミアの人々が「ウクライナ」に見切りをつけた瞬間だった。

続き③

- ここで、ウクライナとクリミアの情勢を注視していたロシアが動く。2014年2月27日、クリミア自治共和国では、議会が武装集団によって取り囲まれる騒然とした状況の中で、親ロシア派のアクショーノフが自治共和国の新首相に任命される（このあたりは、完全にキエフの政変のしっぺ返しです）。それとほぼ時を同じくして、ロシア軍と見られる集団がクリミアに展開。
- 3月1日にプーチン大統領は、ロシア系住民の保護を理由に、ウクライナへのロシア軍投入の承認を上院に求め、上院はこれを全会一致で承認。
- さらに、3月6日にクリミア議会はロシア連邦に加入する方針を決定し、クリミアの国家的帰属を問う住民投票を3月16日に実施することを決めた。
- 投票の結果、クリミア自治共和国では96.8%が、セバストポリ市では95.6%がロシア編入に賛成。この結果を受け、ロシアはクリミア、セバストポリとそれぞれ編入に関する条約に調印し、条約は4月1日に発効。

The Asahi Shimbun Globe+　　2018.9.11　服部倫卓（みちたか）

旧ソ連地域研究者・ジャーナリスト・経済学者。

一般社団法人ロシアNIS貿易会・ロシアNIS経済研究所所長

クリミアの現状

- クリミアの市民社会は、2014年の併合以来、ロシアの法律で規制され、合致しない組織は全て制限され、締め出されている。政権当局は、過激な行動をとる活動家やジャーナリストを定期的に取り調べ、拘留して罰金を科し、逮捕している。狙われているのは、タタール人や親ウクライナ派、あるいは人権保護組織の関係者だ。
- 併合に対する不満を表明しただけで、多くの人々が裁判にかけられ、拘束されている。クリミアの映像作家オレグ・センツォフは、テロ行為の名で禁固20年の実刑判決を受け、2019年に捕虜交換の枠組みで釈放さた。
- タタール人共同体も迫害され、マジョリスといわれる伝統的な国民議会は、立場が親ウクライナという理由で、活動を禁止されている。
- ウクライナの海運もまた黒海、とくにアゾフ海で締め付けにあい、貿易が制限され、軍の展開にもブレーキがかかっている。クリミア大橋の高さが極端に低くおさえられ（高さ33m）、軍艦や大型貨物船がアゾフ海に入るのを妨害されているうえ、ロシアの管理手続きが大きな負担になっている。

『ウクライナ現代史』（アレクサンドラ・グージョン、河出新書）より

上段左から　クリミア自治共和国、ルガンスク人民共和国、ドネツク人民共和国
下段左から、ロシア、床屋のサインポール、ベラルーシ